

1

説明的文章

◆指導ページ P.2～5◆

【指導のポイント】

★指示語・接続語に注意し、段落相互の関係をつかめるようにする。

★段落ごとの内容をつかみ、要旨を読み取れるようにする。

演習問題の板書例

■テーマ
人の思惑に鈍感な筆者の性格を逆手にとって、窮地を脱する方法について

■展開

●人の思惑

・ふつうの人⇒敏感に反応

← 接し方に変化⇒嫌われている相手には嫌な応答。

← それに相手が再び反応⇒悪循環。

← 敵対関係が生まれる。

⇔ところが

・作者⇒鈍感

← 嫌い疎んじる相手⇒接し方が変わらない。

← 相手との関係がそれ以上悪くなることはない。

← 自分の活動を積極的に妨害する敵をつくらない。

●作者⇒その鈍感さに、窮地から救われた。

← 客観的に状況を自覚しつつ、クヨクヨと悩み続けることはない。

← 自分ができることを淡々とやり続ける。

← いつの間にか窮地を脱する。

●例遭難者⇒奇跡的に助かった人。

← 困難を自覚しつつも絶望しない。

← その時点でできることを淡々と行う。

= 作者との共通点

■筆者の主張

●乗り越えられなさそうな高い壁

← とりあえずは身近なポイントを目標に行動を繰り返す。

← 高い壁を乗り越えてしまった。

●窮地を自覚し、その時点で自分がよかれと思うことをひたすら淡々とやることを心がけるべき。

2

文学的文章

◆指導ページ P.6～9◆

【指導のポイント】

- ★場面や情景、人物の心情を正確にとらえることができるようにする。
- ★主題を正確にとらえることができるようにする。

演習問題の板書例

■読解の注目点

情景の変化に応じた仁美の気持ちの動きを読み取る。

■仁美の心情の変化

●〈家の裏山を探検する仁美〉

引越してきたばかり⇒未知の世界

←すべてが新しい

←わくわくするような気配・胸が高鳴る

⇐新しい土地は新しいスカートよりも上等かもしれない

●〈細道を進む仁美〉

迷子になるかもという不安

←引き返す⇒恐がる自分を認めてしまう

←女がすたるとい言葉⇒背中を押し続ける

←「すたる」と声を出す⇒力強い気持ち

●〈男の子と仁美〉

・木陰から男の子が突然に出現⇒仁美を飛び上がらせた⇒ひどく驚く

←頬が熱くなるのを感じる⇒恥ずかしい

←仁美と男の子の会話：台詞が短い⇒親しみが無い

←どうしていばっているんだろう⇒憎らしく思う

・男の子の命令「来い」

←仁美⇒一瞬迷うが、男の子の後に続く⇒「だって、女がすたる。」

←竹林の風景

←仁美⇒後ずさりする⇒恐怖

←男の子⇒一瞥、再び命令「来い」

←仁美⇒反発を覚える

←しかし
恐がりな自分を認めたくないので従う

・再び、仁美と男の子の会話：台詞が長くなる⇒親しみが生まれている

←男の子⇒仁美に「秘密の隠れ家」を作っているところを見せる

←仁美に親しみを感じている

3

詩歌

◆指導ページ P.10～13◆

【指導のポイント】

- ★さまざまな詩歌の表現技法をとらえることができるようにし、それぞれの特色を覚えさせる。
- ★詩の情景を読み取り、主題をとらえることができるようにする。

例題の板書例

この夏の一日

← 房総半島の突端で泳いだ↓沐浴のようなひとり泳ぎ

= 布良

← それは人影のない岩鼻

← 岩かげで水着をぬぎ、体をふく…私の夏||終っていた

← 切り通しの道を帰る

← ふりむく

← 岩鼻に海女が四、五人いた

= 私

← かがやき

← 私の夏の日の場所にいる

過ぎ去っていく夏に対して感じるしみじみとしたさびしさを表現している

表現技法

- ・ 比喩：何かを別のものにたとえる。
- ・ 擬人法：人間ではないものを人間のように表す。
- ・ 体言止め：行の終わりを体言(名詞)で止める。
- ・ 倒置法：語順を変えて意味を強める。
- ・ 対句法：同じ形で内容を並べる。

演習問題 1 の板書例

朝になると

← 「いつてくるわ」と云って娘(菜穂子)が学校へ行く

← 髪の毛も短く、両側を三つ編みにしている

← 身軽な小鳥のように、すぐに見えなくなる

← 汽車にのって学校へ行く

作者

= 前掛けで手をふきながら見送る

母親

← 娘の出かけて行ったあとをいつまでも見つめている

+ 花の上を歩いてゆくたのしげな足どり

← 行く手にひろがる遠い空の深さ

← 母親が思い浮かべている

← 矢のゆくえ||成長して巣立ってゆく娘の未来

見守る人||母親||作者

← たたずみみつめている||不安や期待とともに思いやる

演習問題 2 の板書例

A 白鳥は哀しからず季語||冬、かもめ

← 空の青海のあをにも染まずただよふ

B その子二十初句切れ／櫛初句切れに流るる黒髪初句切れの

← おごりの春のうつくしきかな

← わがままにふるまう

← 青春の真つ盛りをほこっている

※青春のすばらしさを表現している

C みちのくの母のいのちを一目見ん東北地方

← 一目見んとぞただにいそげる句切れなし

← 繰り返し → 作者の切実な思い

← 焦り

← だけに…ひたすらに

D もず鳴く季語||秋

← 甲高い声で鳴く鳥

E 菜の花季語||春や月切れ字は東に日は西に初句切れ

← ×季語||秋 ↓ 主題がどちらかで判断

← 対句

← 切れ字も判断材料

※静かな夕暮れ時の美しい春の風景を、絵画的に描いている

4

古典

◆指導ページ P.14～17◆

【指導のポイント】

- ★歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの違いに注意し、歴史的仮名遣いについて理解する。
- ★助詞や主語の省略に注意し、内容を読み取ることができるようにする。

例題の板書例

<p>五月に山里を乗りまわること =</p> <p>とても趣がある</p>	<p>草の葉も水も青々と見えている ←しかし</p> <p>表面はさりげなく草が生い茂っているところをまっすぐどこまでも行く ←</p> <p>下には、水が流れている ←</p> <p>従者などがあゆむにつれて飛沫となって飛び上がる ←</p> <p>非常に興味深い</p>	<p>道の左右にある垣 ←</p> <p>木の枝などが、牛車の屋形にはいりこむ ←</p> <p>車内でいそいでつかまえて折ろうとする ←しかし</p> <p>車から通り過ぎて、手からはずれてしまうこと =</p> <p>非常に残念</p>	<p>蓬の車の輪におしつぶされたもの ←</p> <p>輪がまわるにつれ、顔に近くにかおる =</p> <p>趣を感じる</p>	<p>枕草子</p> <p>平安時代に清少納言が書いた随筆集。 四季の風景や宮廷での生活の体験などが、鋭い感性で描かれ、清少納言が「をかし(趣がある)」と感じたことを中心に書かれている。</p>
---	---	--	--	--

演習問題 1 の板書例

<p>冬がやってくる ←</p> <p>炭火のそばが離れにくくなる ←</p> <p>露と霜が置きかわり、もみじは濃くなり、木々のこずえも、ちがやの生えている野原も ←</p> <p>冬枯れの景色 ←</p> <p>十月の時雨も過ぎると、日差しも暖かい ←</p> <p>少し春めいた感じがする ←</p> <p>小春 =</p> <p>しかし =</p> <p>次第に日が重なる ←</p> <p>風の吹きぐあいもだんだん激しくなる ←</p> <p>木の葉が降るように散る ←</p> <p>山はむき出しに見られる ←</p> <p>残っている松も峰のあたりにさびしそうに見える ←</p> <p>春夏秋の優美な景色も ←</p> <p>美しく飾り立てた風物のありさまも ←</p> <p>冬になるとなくなってしまう ←</p> <p>冬意外に変わりはてた様子…おどろくこと</p>

演習問題 2 の板書例

<p>今日はこちらの事をしようと思った ←しかし</p> <p>急用が起きて、それに紛れて暮らし ←</p> <p>待っている人はさしつかえがあつて ⇒</p> <p>頼みにしていない人は来る ⇒</p> <p>頼みにしている方面はあてがはずれ ⇒</p> <p>思いがけない方面のことばかりうまくいく ⇒</p> <p>めんどろで心配していることは無事にすむ ⇒</p> <p>やすやすとゆくはずのことは心をいためる ⇒</p> <p>←</p> <p>日々のようすは、予想していたこととは違う ←</p> <p>一年を通してみてもそうである ←</p> <p>←当然</p> <p>←</p> <p>生涯についてもそうである ←</p> <p>←</p> <p>前々からの予想 ←</p> <p>みならずれるかと思うと、はずれないこともある ←</p> <p>←だから</p> <p>←</p> <p>物事を決めることがむずかしい ←</p> <p>←</p> <p>世の中⇨不定なもの⇨真実</p>	<p>徒然草</p> <p>鎌倉時代に兼好法師(吉田兼好)が書いた随筆集。 仏教的無常観と古き良き時代への懐旧の情が色濃く表れている。</p>
--	--